

1. 1 能登半島大地震 M7.6

2024年1月1日16時10分。日本ではコロナウイルス感染症による自粛の雰囲気も少しずつ緩んだ新年に世界中を驚かせた大災害が起きてしまった。轍No. 146で紹介した群発地震では、2022年6月19日に石川県の能登半島、珠洲市で記録した最大震度6弱を上回ったが、この大地震は「震度7」の大揺れ、さらに大津波警報が発表された。インターネットを通して被災された人々の様子や、建物の被害を即時に見ることはできるが、ライフラインが完全に遮断された雪国では想像以上の苦しさを抱えているに違いない。救命確率を測る目安の72時間（3日間）を超えた今も地元の消防団や自衛隊による懸命な救助作業は続く。本校に通う生徒の保護者の方々の年代は1995年に起きた阪神淡路大震災（1.17）を思い出すだろうし、2011年に起きた東日本大震災（3.11）での冬の苦しい状況が再び頭をよぎる。

【北國新聞 1月4日5:00 より】

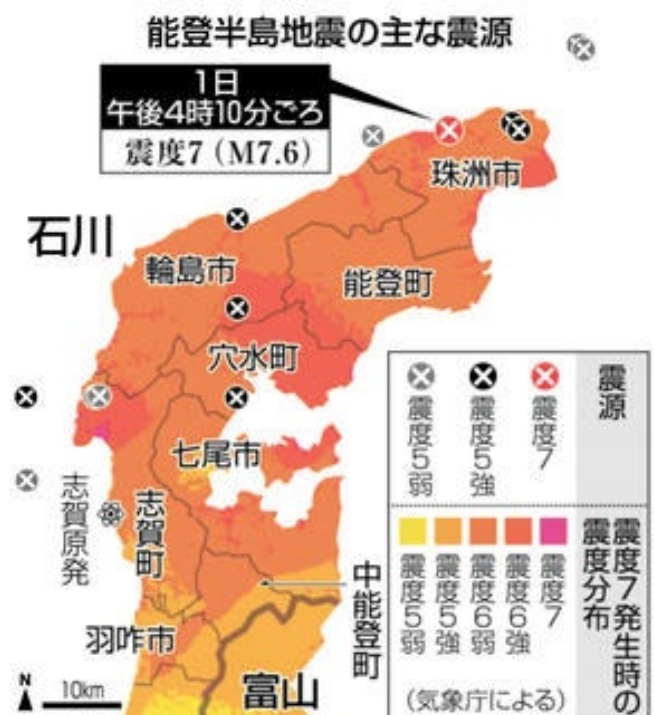
生存率が著しく下がるとされる「発生後72時間」が4日午後に迫る中、能登各地で3日、警察官や消防、自衛隊員が救出活動を続けた。「人が中にいる」。輪島市河井町の倒壊ビル現場では、冷たい雨が降り、「ドン」と下から突き上げるような余震が続く状況で、大阪から来た消防隊員が懸命に救助を急いだ。

輪島塗の五島屋の7階建てビルが横倒しになった現場では、ビルとがれきの間に女性が取り残された。輪島市内を巡回していた大阪府の消防隊が朝、ビルの隙間でがれきを自ら撤去していた住民男性から女性が取り残されていると聞き、午前10時に救助活動を始めた。ビルはさらに倒れる危険性があり、救助は難航。約1時間後に起きた震度5強の地震では、ビルはぐらつき、現場の隊長から「退避」と大きな声で叫んだ。



↑ビルの倒壊現場（3日の輪島市の様子）

↓珠洲市に津波が到達（8日の報道より）



【北國新聞 1月10日5:00 より】

「早く見つけてあげて」。降りしきる雨の中、住民たちは連絡が取れなくなった隣人の安否を気遣い、祈るように見守った。9日、能登半島地震で一帯が焼け野原となった輪島市の観光名所「輪島朝市」周辺で石川県警が150人超を投入して実施した捜索活動。がれきの下に残された人の痕跡が発見されたのか、警察官が捜索の手を止め、周囲から見えないように現場をブルーシートで覆うと、住民たちは目を潤ませ、手を合わせた。

午後1時前に富山、岐阜、山形などの各県警の警察官が列をつくって規制線の中に入り、10人ほどの班に分かれて捜索を開始した。焼け落ちたがれきに踏み込み、手で慎重に取り除いたり、スコップで土を掘り起こしたりした。午後2時半ごろ、朝市通りの入り口から100メートルほど奥に進んだ場所で活動を行っていた捜索隊員の手が止まった。ブルーシートが張られたことから、遺体が発見されたとみられる。その後、鑑識や科学捜査研究所（科捜研）の担当者が慌ただしく出入りし、シルバーのワゴン車が到着。見つかったとみられる遺体を運び込んだ車の中も様子が分からないようにとシートに覆われた。

↓朝市通り周辺で大規模火災が発生（1日の報道より）

↓朝市の捜索現場から出る車両（9日の様子）



私たちにできることは何でしょう

地震発生から日時が経つにつれ、被害の大きさが浮き彫りになってきました。安否確認がまだとれていない方々の数や、到達した津波の高さ、支援物資を届けるにあたり気を付けなければいけないことなどさえも、伝えられる情報は常に変化しています。被災地の外から見守ることしかできない場合は、そのことを冷静に見つめ、的確に行動すべきではないでしょうか。本校の生徒たちや、被災地を思う活動を続けてきた卒業生の提案により1月10日から12日の3日間、校舎前で募金活動を行います。

現地ですぐ助けに行くことや物資を届けることは不可能ですが、必要となる手助けに向けて、集められた募金を支援団体へ寄付する予定です。ご協力をお願いします。

